View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

地域における教育の伝統とソーシャル・キャピタルの形成

― 伊勢崎地域における近世の地域教育と明治期の指導者 ―

松　嵜　久　実※

要旨

ソーシャルキャピタルは、理論的、実証的視点から研究できる。筆者は、伊勢崎織物業の歴史的発展を扱う研究でソーシャルキャピタルが地域経済にどのような影響を与えたかを分析した。そこでは、人々の相互の信頼関係、形成されたネットワークであるソーシャルキャピタルが、織物業発展をもたらしたこと、生産のあり方、経済環境によって形成されたソーシャルキャピタルの変化があることを実証した。しかし、思想的、宗教的要素がソーシャルキャピタルに与える効果について検証することができていなかった。

本研究では、江戸時代後期に伊勢崎地域で発展した儒教と和算の学問と、郷学と私塾の形態で行われた地域教育の普及、そして人々のネットワークを実証した。さらに、それらが、近代社会の地域の指導者形成とネットワーク形成にどのように影響しているかを分析した。

多くの儒学者、和算学者が伊勢崎地域で生み出されていた。学者達は、地域で学ぶだけでなく、江戸、長崎と広く見聞を広げて、優れた視野を持つ体験をしていた。学者は、郷学と呼ばれた藩に認められた庶民対象の教育機関で若い人々を教えるだけでなく、私塾でも教えていた。また、学者達は、広くネットワークを形成し、地域の文化を発展させていた。その社会環境と教育によって、地域の指導者になっていった人々は、倫理観と広い視野を発展させることができた。そのような倫理観と視野なくして、不確定な状況のなかで、社会的なネットワークを形成し、社会の豊かさを高めることは困難であった。明治期以降のネットワーク形成は、近世のネットワーク形成の伝統の下にある。

地域の教育の伝統は、ソーシャルキャピタルの形成に大きな意義をもっていたと結論付けられる。

キーワード　ソーシャル・キャピタル、伊勢崎織物業、儒学、ネットワーク、郷学

目次

1　はじめに
2　近世伊勢崎地域の政治・経済的特徴
3　郷学・私塾の普及と儒学・和算の伝統
4　学者に学んだ地域社会の指導者たち
5　伊勢崎における自由民権運動
6　地域の人々の重層的なネットワーク
7　ネットワークを形成する思想　むすびにかえて

※浦和大学短期大学部

1　はじめに

伊勢崎市とその周辺で営まれた伊勢崎織物の発展過程で、ソーシャル・キャピタルと呼ばれるものが、地域に形成されていたことが実証されている。しかし、その背景は明確にされておらず、狭い地域に人々が住み、重なるように活動していることが、自然発生的に人々のネットワークと結びつきを作ったと考えられていた[1]。

伊勢崎織物が発展した明治期の伊勢崎町周辺の経済・政治活動のリーダー達は、多くが近世、江戸時代末期から明治初期にかけて、漢学と呼ばれる教育を受けた人々であった。とりわけ、江戸時代伊勢崎藩が置かれていたこの地域では、藩校で教育されたものは、儒学のなかでも朱子学が中心であった。朱子学は武士社会の理論的な支えとして、江戸幕府公認の学問であり、朱子学を学ぶ事が、明治維新以降の社会のリーダーになる糧になると考えることには、疑問が生まれるだろう。また、儒学を重んじてきたことにも「旧藩の因習を踏むばかり」という批判が加えられていた[2]。

また、この地域では、幕末から明治初期にかけて、郷学と呼ばれる私塾と藩校の中間に位置する庶民教育の機関が、全国的にみても傑出する密度で配置されていたことが知られている[3]。

幕末・明治のいわば旧来の教育の伝統と、明治期の伊勢崎地域の経済・政治活動のリーダー達がもっていた思想、そして、教育された人々が行った実践を、相互の関係を含めて検証することが必要になろう。実践の内容がどのようなソーシャル・キャピタルであるのか、検証も必要である[4]。

ところで、著者が2001年にソーシャル・キャピタルを「無形の資源」と名付けて伊勢崎織物業の発展過程で分析した段階では、日本でソーシャル・キャピタルを実証研究するものはなかったし、ソーシャル・キャピタルを理論的に整理した日本語文献もなかった[5]。その後、次々に理論的にも分析されるようになった[6]。この論文で、「無形の資源」とせずに「ソーシャル・キャピタル」としたのは、この10年間のソーシャル・キャピタルに対する社会的関心、研究者の関心を考えて、広く普及している用語にするためである。

また、ソーシャル・キャピタルの定義は多くの研究者が試みているが、先行研究を代表するパットナムやアスレナーとの関係で、筆者の視点を地域社会の歴史的理解という点から整理しておこう。

ソーシャル・キャピタルは、通説的には、友人・同僚・隣人のネットワーク、互酬的な関係性、信頼が含められる[7]ものと説明できる。筆者は歴史的な地域社会との関係のなかで、個人の行動規範であるだけでなく、人々の行動規範になる社会背景を問題にした。そして、地域が手段でなく、目的となりうることによって、地域原理と呼ばれる規範があること、その規範が地域で共に生きる人々の行動規範になることを実証した。経済活動でいえば利潤極大を追求する資本原理だけでは地域で活動する経済主体の説明原理たりえず、資本原理と地域原理の関わりのなかで経済主体が説明されることを実証した。

ソーシャル・キャピタルの理論的な検討は別稿に譲るとして、本稿の歴史研究との関係に限定して言及すれば、ネットワークを形成する利益が参加する人々に理解されているならば、互酬性からネットワークを維持することができる。しかし、その利益が不確実である場合には、リスクを取って活動をリードし、人々を導くリーダーの存在が不可欠である。いわゆるシュンペーターのいう企業家的なリーダーが必要になる[8]。

ところで、絹織物業地としての伊勢崎織物業は、日本を代表する西陣と肩を並べる桐生の近くにあるが、生産される織物製品は、大正中期にも「純朴な風味」「味噌付け饅頭の味」「笠松の形貌を表徴とする農民の発明したる、唯一の美術品」と紹介されており、織物業の後進地であった[9]。明治期には、零細な機業家が集まり、流通機構や金融機関を整備しつつ、産地として発展途上にあった地域である。近世に既に多くの絹織物業地が成立していたが、すべてが明治維新の動乱を超えて発展してきたわけではない。伊勢崎も産地として解決すべき多くの課題を抱えていたのである。伊勢崎は零細な業者が集まり、流通資本の発達も桐生や足利という近隣の先進地に比較して遅れていた。

産地として不利な状況を克服する努力が求められていた。高級な絹織物ではなく、庶民的な絹織物産地として需要を拡大してきた伊勢崎は、技術革新が新しい低価格原料の使用が技術的に可能にする度に、その技術をどのように産地に取り組むかの問題を突き付けられた。織物組合の指導者は、この状況のなかで、織物業者全体に進むべき方向性を示しつつ、産地をリードしなくてはならなかった。組合内部の路線対立の歴史が、リードする者の難しさを示している。

明治期には、絹紡績糸の導入を巡って、昭和期には人絹の導入を巡って厳しい対立があった。組合内部の対立となっていない場合も、明治末には、絹綿交織織が一時的に導入されているし、大正期には日本経済全体の不況のなかで市場対応という課題に取り組んでいた。

その意味で、リーダーには共通の認識からネットワークを維持・強化するというだけでなく、対立する認識を乗り越えてネットワークを組み替え、強化する役割があった。困難を克服する資質と、人々を導く長期の幅広い視野が必要であった。

経営学では、企業組織を長期に導く経営の方針を経営戦略と呼ぶ。さまざまな定義あるが、教科書的なひとつの定義は、「価値創造を志向した将来の構想とそれに基づく企業と環境との相互作用の基本パターンであり、企業内の人々の意思決定の指針となるもの」である。そして、「将来の構想」は、「将来の方向性を与える一定のビジョンな戦略意図が存在し、それによって短期的な目先の現象にとらわれないで長期的な展望を提供するという機能がある」と説明されている。また、「企業と環境との相互作用の基本的パターン」は、「企業が各利害関係者とどのような相互作用を展開するか」という内容である[10]。

社会の変化のなかで地域の経済活動をリードするには、長期的な展望を必要とする。また、産地の業者の結束だけでなく、消費者に近く、市場情報をより的確に把握する流通資本とどのように提携するのか等、関係する利害関係者との連携が必要である。組合活動を成功させるには、企業家的な経営者に必要なこうした資質が求められていた。

企業家的な活動をしてきた経済人、地域の政治的指導者の事例は、それらの人々が資質と視野を陶冶する機会があったことを個別の事例として示している[11]が、産地として多くのリーダー達に高い資質と広い視野が必要となる場合には、個別性を超える共通の陶冶の機会が地域にあったのか否かが問題となろう。

本稿では、歴史的な過程のなかで、広義のソーシャル・キャピタルが形成する担い手が、どのように陶冶されたかを検証する。

2　近世伊勢崎地域の政治・経済的特徴

2. 1　武家支配層の経済的危機

本稿で分析する伊勢崎地方では、近世から被支配階級である農民、商人の教育が盛んであった。それは近代社会を準備するものであったと考えられるが、その社会背景を確認しておこう。

幕藩体制下の藩・旗本の財政は、米麦等の穀作物の生産に対する年貢と言われる課税に依存していた。伊勢崎藩の年貢の大部分は、「本途物成」と呼ばれる土地に課税されたものであった。天和元年（1681）の立藩当時と、明治4年（1871）の廃藩置県の本途物成の収納高を比較すると、歳入はほとんど変化していない。天和元年から元禄2年までの9年間の平均は、田から6,718石余、畑方1,746両余り、明治3年～ 4年にかけての一年間に、田方5,884石余り、永1,845貫余となっている[12]。

田では、収穫の過半が年貢として収奪されていた。しかし、農民は近世中頃から年貢が課されない養蚕、製糸、織物にも労働力を向けていた。伊勢崎藩の借金が史料で明らかになるのは、明和3年（1766）の御用達と呼ばれた豪商・豪農からの冥加金850両の上納からであるが、初代藩主の終わり頃には既に財政は苦しくなっていたと推定されている[13]。

浅間山噴火等の影響で藩財政が悪化した文化7年（1810）には、御用達の出資と藩の米札提供によって米払会所が設立された。文化12年（1815）には、出資者の氏名と金額一覧が史料として残されているが、小暮此右衛門2,500両、矢内新蔵2,000両の他、20名の者から、合計1万4千両余の出資を受けていた[14]。

天保10年（1839）の財務担当者の計算に基づいて、家臣への米の現物給与を除いた収入は7千両から7千5百両と推定されている。一方、経常的な支出として江戸藩邸と伊勢崎陣屋で、4千両が必要であったと推定されている。この年、伊勢崎陣屋で1万3千両余、江戸藩邸で1万1千両余の借金があり、合わせると藩の借金は、天保10年（1839）には2万4千7百両余であった。これが、弘化4年（1847）には、4万7千両余と、倍近く増加していた。これは、城主の大坂の幕務のための支出、江戸城普請の献金等が重なったからといわれている[15]。

この年、藩の家老は、宗家酒井家の江戸屋敷を訪ねて面談しているが、そこで、伊勢崎の御用達に8千両を出資させたいが、伊勢崎藩自身では命じることができないので、宗家酒井家から命じてもらいたいと願い出ている。近世後期には、武士階級は、社会を統治する力を失いつつあった。

藩は、御用達からは冥加金という名目で借金するとともに、より広く無尽講的な講を組織して、借財していた。講では、引き受け手は、毎月掛け金を積み立て、籤で当たると掛け金以上の当たり金が支払われた。藩は、掛け金の運用から利益を得ようとしていたが、引き受けた村々では冥加金を納めて、講に加わらない村役人（農民のなかの自治役職）が嘉永４年（1851）の講では2千人以上になっていた[16]。

さらに、安政5年（1858）には、農民により広く課税する方法を採用しようとして、強い抵抗を受けていた[17]。

2．2　商品経済の発展と豪農・豪商の台頭

佐藤信淵が著した『経済要録』によると、元文元年（1736）に大坂に集荷された絹織物産地として伊勢崎が挙げられていることから、伊勢崎が絹織物の主要な産地のひとつとして知られるようになるのは、18世紀初めと考えられている。宝暦9年（1759）には約1万匹の絹織物、生糸3千貫が取引され、絹買宿を営む業者が15名いたことが知られている[18]。

さらに下って弘化4年（1847）には、藩内の元機屋が連名で冥加金の納入を藩に申し入れている。機業家としての共通する利害もあったと推定される。そして、この申し入れでは、67名の「太織縞機屋」の総代として、木島村（境町）の高木幸助、下植木村の下城近右衛門がなり、世話役として、伊勢崎町の「年寄」という地位の町役人、細野伝左衛門（後の細野時敏）らを「機屋世話方」として記載している[19]。

地域の商品経済の進展のなかで、伊勢崎における六斉市の性格も変化したと考えられている。16世紀後半には、町に市が立っていたが、17世紀後半には、本町・新町・西町が順番に市を立てる方式が定着していたと考えられている。この市は、地域の人々が生活に必要な日曜雑貨や農具などを仕入れる場所から、地域の特産物を取引する場所に変化していたことが指摘されている。そのことを明示的に示す史料は、天明8年（1788）の市場の混乱に関連する文書で、そこには「在々」から持ち出す「糸絹木綿その他」という記述があり、特産物を取引する市場となっていたことが示されている[20]。さらに、織物生産が盛んになると、従来の市場では手狭になったようで、嘉永2年（1849）に市場関係者から、7月8月の2ヶ月だけは、絹糸の市場とは別に織物市場を立てるように指示してくれるように、町役人を介して藩役所に願い出ていた。この願いは、部分的にしか認められなかったようであるが、織物市場が町にとって重要な意味を持ってきたことを指し示している。

2．3　小括

近世は、士農工商という武士を頂点とする身分社会であるが、商品経済の発展のなかで、武士の体制の維持が豪農・豪商の経済力に依存するものになっていた。経済的な実力を備えた人々は、伊勢崎町の町役人、旗本領では支配地を管理する陣屋の主体として、そして村々の村役人となっていた。また、御用達として個別に資金を提供するだけでなく、富裕層は米払会所に組織化されていた。また、織物業者は組織化して冥加金を納めていた。伊勢崎町の

町役人層は、商品経済化に対応する市場の維持発展を追求する立場にあったし、織物業者の組織化の後ろ盾ともなっていた。

３　郷学・私塾の普及と儒学・和算の伝統

江戸時代後半、伊勢崎地域には郷学や私塾が多数生まれていた。また、優れた学者を輩出していた。明治期以降に伊勢崎地域で活躍した人々が、郷学と優れた学者の私塾でどのように教育されていたのかをみておこう。

3．1　郷学の普及

伊勢崎藩では、藩主みずから、藩士と領民の教育に積極的であった。三代藩主酒井忠温の下で、藩校学習堂が安永4年（1775）に設立されている。藩内の儒学は山崎闇斎の流れをくむ朱子学であった。

伊勢崎藩は、藩校と寺子屋の中間に位置する郷校（郷学）が多かった地域として注目されており、石高２万石の小藩伊勢崎藩に文化5年（1808）から明治4年（1871）に25もの郷校が活動しており、日本全国のなかでも水戸藩とならぶものと紹介されている[21]。

上州で最も早く郷学が生まれたといわれている伊与久村（現在の伊勢崎市伊与久）では、藩校の儒者から学んだ豪農が、さらに江戸に出て儒学者に学び、地域に戻って人々に教えていた。享和3年（1803)、宮崎有成ら7名が出資して学堂を建設し、授業を開始した。この7名のなかには、江戸で学んだ4名の人々が入っている。

さらに文化5年（1808）には、藩から認められ郷学五惇堂となる[22]。近世の農村で豊かな経済力をもった人々が、学問を自ら深く学ぶとともに、地域の人々にも教えていたのである。

さらに、文化5年（1808）には、饗義堂が設立される。この郷学は、藩士浦野知周が指導者で、彼は多くの優れた門弟を育てており、尊皇思想家高山彦九郎も、弟子であった。郷学の運営には、村人の資金提供があったといわれている[23]。

3．2「小学」の意義

郷学のテキストとして、伊勢崎藩は儒学の教本のなかでも「小学」を配布している。「小学」は、儒学者朱子あるいは朱子の弟子が儒学者の言葉を集めて、274条目に整理したものである。「小学」と呼ばれているが、決して、年少者だけを想定した倫理書ではない。日本の儒教に大きな影響を与えた学者朱子は、「修身（身を修める）の大法は、小学の書に備われり」と述べている。優れた政治をしたことで知られている会津藩主保科正之は、小学を読んで、身を修め、国を治める助けにしたと伝えられている[24]。保科正之は、明暦の大火で江戸城が焼け落ちた後、天守閣の再建を中止させ、予算を江戸の再建に投じたこと、会津藩で飢饉時の農民のため社倉制を創設したこと等が知られている。支配階級であるが、支配階級が社会全体の利益を考えなくてはならないことを理解していた大名であった[25]。

「小学」には、次のような文章がある。「荀子曰く、人に三不肖あり、幼にして而も肯て長

に事えず。賤にして而も肯て貴に事えず。不肖にして肯て賢に事えず。是人の三不肖なり。」（原典は、「荀子」）

この文章には、未熟な者の賢者に対する接し方を諭す言葉である。このことの意味を伝えるには、未熟の意味、賢者の意味を伝える必要がある。受け取る者、教える者の理解力の範囲で伝えられる内容である。

また、「曾氏曰く、君子は文を以て友を会し、友を以て仁を輔く。」（原典は「論語」）

訳せば、教養で友人を得て、友人同士で仁の心を磨くという意味であるが、これもまた、深い理解力があって初めて意味が分かる言葉であろう。

藩の庶民教育という意味では、統治の狙いはあろうが、その言葉を解釈して伝える過程は、深い意味での倫理教育という性格をもっている。

3．3　儒教の意義

「小学」を含めて、封建社会の支配者の理論であった儒教が、明治以降の近代社会に意義をもったことに疑問をもつ人も多いであろう。しかし、明治維新に多くの銀行、事業に関係した明治財界の指導者のひとりである渋沢栄一が、『論語と算盤』を著しているように、倫理的な思想なくして、人々を結びつける事業をすることは難しいであろう。近世からの織物業地域であった桐生で、桐生国学という学問が発展し、織物業者が学問の人脈のなかに入っていることは、決して偶然ではない。

儒教の倫理的な意味を、「義」についてみると、「義」は、儒教の主要な思想であり、五常（仁・義・礼・智・信）のひとつである。正しい行いを守ることであり、人間の欲望を追求する「利」と対立する概念として考えられた（義利の辨）。孟子は羞悪の心が義の端であると説いた。羞悪の心とは、悪を羞じる心のことである。

渋沢は、その著書のなかで次のように言っている。

「現代の青年が、いまもっとも切実に必要としているのは、人格を磨くことだ。中略

人は往々にして利己主義－自分だけがよければいいという考えに走り、利益のためにはどんなことにも耐え忍んでいくといった傾向を持ち始めている。中略

もしかりに国民の頼りとするべき道徳の規範が確立し、人々がこれを信じながら社会のなかで自立したとしよう。そうすれば、人格はおのずから磨かれるようになる。その結果、社会のことを考えるのが大きな流れとなり、自分の利益だけを追求すればよしといった風潮はなくなるだろう」としている。

そして、渋沢自身は、儒教の教えから学んできたという。忠、信、孝弟、仁を次のように説明する。

「忠」良心的であること

「信」信頼されること

「孝弟」親や年長者をうやまうこと

これらは、「仁」（物事を健やかに育む）という、「最高の道徳を身につけるため」と説明

している[26]。

儒教は、人としての生き方を問うという意味で、倫理的に人々を導く可能性をもっていたのである。

3. 4　儒教と日本社会

伊勢崎地域では、朱子学のなかでも山崎安齋の影響を強くうけた儒学が支配的であった。もともと、朱子学は、科挙制度の下で官僚登用試験を受ける学問でもあった。朱子学が背景としている支配体制は、日本の幕藩体制下の支配機構とは大きくことなっていた。

中国の科挙制度は、支配階級の地位は世襲ではない。科挙試験に合格することによって、庶民でも支配階級に入ることができた。主君との関係は、世襲的なものではなかった。また、君主に相応しくないものが上にある場合には、その君主は廃するという革命思想を持っていた。朱子学そのものは、「君、君たらずといえども、臣、臣たらざるべからず」という絶対的服従を命じるものではない。朱子学を日本の支配体制に適合的なものにする努力の跡は、山崎の場合も思想史の研究が明らかにしている[27]。

儒教の思想そのものは、支配体制を強化するだけでなく、革命思想を内包していたのである。藩校の儒学者の弟子に尊皇攘夷家の高山彦九郎がいたことは、けっして不思議ではない。後にみるように、伊勢崎の学者を指導した学者のなかにも、行動的な尊皇攘夷家はいた。

3. 5　和算の伝統

上毛では、儒学だけでなく、和算が研究され、人々に学ばれていたのであり、合理性を追求する姿勢があった。

地域で和算が盛んになったのは、石田恒玄圭（生年不明～ 1817年）と小野良佐栄重（1763年～1831年）という二人の和算家が活躍し、弟子を育てたからであると言われている。天明7年（1787）には、石田とその門人6名が数学の問題を公けにして問う算額を高崎市八幡町の板鼻八幡宮に奉納している。

伊与久では、深町重右衛門北門が伊勢崎藩に仕えた和算家として知られている[28]。宮崎有成とともに郷学五惇堂を設立したことで知られている高井中斉（安永4年　1775年生まれ）の父高井作右衛門は、重右衛門から算学を学んでおり、中斉も伊勢崎藩の儒学者浦野神村から儒学を学ぶ前に、父から算学を学んでいたと推定されている[29]。

伊勢崎地方では、多くの和算家が活躍しており、伊勢崎市史の近世編では、11名の和算家を紹介している[30]。

大津整通（寛保3年（1743）～文政13年（1830））は、伊与久村の農家の生まれである。大津は、同じ村で伊勢崎藩の御用達をしていた深町吉明（1740年～1817年）に師事し、伊勢崎藩に仕えて仕事方にあって和算を教えていたと推定されている。その子、正之も儒学で伊勢崎藩に仕えたと伝えられているが、和算を好んだといわれている[31]。

今村岨雲（宝暦13年（1763）～天保3年（1832））は、医師であった。深町北荘に和算書の

借用を申し込んだこと、連取村の若者達に和算を教えていたことが分かる手紙が残されている。深町北荘の祖父重右衛門北門は和算学者であり、和算書が残されていたのであろう。

飯島吐鳳（天明2年（1782）～天保4年（1833））は、連取村の名主になった人である。岨雲から俳諧を学んでいる。吐鳳が和算をだれから学んだかは特定されてないが、岨雲が連取村の若者に和算を教えていることから、和算も岨雲から学んだのではないかと推定されている。吐鳳は、代数学・幾何学の内容を持つ「聞見算法記全」という本を29歳のとき書いている。残された和算書等から、名主の職務遂行上で、ある程度の和算の素養が必要であったと推定されている。

勝野勝親、勝野勝房は柴宿の和算家である。算額には、伊勢崎藩に関わる記述はないことから、藩士ではなかったと推定される。

柳沢伊寿は、那波郡の人で、多くの門人を育てており、伊勢崎市域には、9名がいたことが門人帳から判明している。それらの人々は、伊勢崎藩に関係するのは、御用達であった矢内新蔵と矢内良助の2名で、他は在地の人々であった。門人のなかでも矢内新蔵と関係が深かったことが伝えられている。

高柳清十郎は、文政7年（1810）に国領村に生まれている。算学塾を開いていた伊与久の大谷方明に師事したといわれている。彼は、明治期の蚕種業振興に貢献しており、蚕種組合の豊受組合の頭取であった。また、明治中期には私塾共立学校を運営していた[32]。

このように伊勢崎地域では、和算が広く学ばれていた。そして、豪農ら被支配階級の人々が多く学んでいた。指導する人も、武士以外の人が多かった。

3. 6　私塾の伝統

郷学とともに、学者が個人的に開く私塾も多数存在していた。高名な学者に幼い時期から子弟を学ばすことというエリート教育ができたのは、近世社会のなかで経済的な力をもってきていた地域の豪農・豪商層に限られていたであろうが、多くの子女が私塾に学んでいたことが明らかにされており[33]、教育の広い裾野を形作っていた。この私塾で学ばれていたのは、漢学だけではない。和算も多くの人々に学ばれていた。

3. 7　地域の学者

明治期以降に伊勢崎地域で活躍した人々は多くは地方名望家の出身であり、漢学を中心に深い教養を身に付けた学者に幕末から明治前期にかけて、私塾等で指導されていた。次にそうした学者をみよう。

長尾景範

長尾景範は、下植木村の武士で、江戸に出て学問を岡田寒泉に学び、さらに寛政2年に幕府学問所昌平学の責任者になった朱子学者柴山栗山に学んでいる。また、館林候松平斉厚の家臣河野通弁に軍学を学んでいる[34]。さらに文化10年（1813）には、関西諸国を歴訪し、高

名な学者や塾を訪れていると伝えられている[35]。藩校の師範役を務めるとともに、自宅で子弟を教育していた[36]。朱子学と、軍学など幅広い教養を見つけて広い視野をもっていた学者である。伊勢崎織物のリーダー下城弥一郎は、弟子のひとりである。

細野時敏

細野時敏は豪農であるが、藩政に関与していた。藩の学風が朱子学で経書を教えるにすぎなかったので、有為の人材を育成するには適していないと、多数の反対を廃して、埼玉県血洗島の人、桃井仙蔵を藩主の師範役の名義で招聘し、史学を加えたことが功績として指摘されている[37]。幕末には勤王の志をもって活動しており、元治元年（1864）水戸藩の武田耕雲齊が挙兵して、上毛に入ったとき、助けたことから、宮崎有敬らとともに、幕府に捕らえられている。明治維新後は、抜擢されて士族の身分となり、県や中央政府で活躍の後、伊勢崎に戻り、武孫平に譲るまで、戸長となっている。その後、石川泰三が協同社を設立したとき、その顧問をしており、その学問と行動力は地域の青年に大きな影響を与えていた。

なお、幕末に細野とともに幕府に捉えられた宮崎有敬は、先に伊勢崎地方で最初の郷学を設立した伊与久村の豪農宮崎有成の子で、父から儒学を学んでいる。ふたりに共通するもののひとつは、儒学であった。

新井雀里

新井雀里は伊勢崎藩士であるが、多くの豪農ら地域の人々を教えていた。

雀里（1813年生まれ）は、天保3年（1832）藩校の助教になり、27歳で藩校学習堂の教長になっている。明治期の学制改革後、明治13年（1880）南渕塾という私塾を開設するが、その活動期間は短く、明治17年（1884）には廃塾している。教育者としての活動は、明治期に私塾を開設する前、藩校の学者として、郷学に集まる人々を教えていた時期が中心であろう。

彼が、明治期に南渕塾で使用した教科書から、授業内容をみると、修身学科は、朱子が編纂した四書等24冊が教科書となっている。歴史学科の使用教科書は、十八史略等、中国の歴書だけでなく、大日本史等の日本の歴書も含まれており、241冊となっていた。また、詩文学科では、未定となっている唐宋諸詩集を除いて、唐詩選3冊の他、22冊が教科書となっていた。漢学といっても、歴史学が重要な科目となっていた[38]。私塾で豪農らの子弟を教育していた時期にも、儒学だけでなく、史学も教えていたのであろう。

新井雀里は、明治33年（1900）に没するが、門人が41年（1908）に雀里会を結成し、遺徳を偲んでいる。会員には、星野源左衛門、相川之賀、森村尭太らの地域社会の指導者がいる。

設楽天僕

伊勢崎の教育家であった設楽天僕は、天保12年（1839）に油・砂糖を扱う商人の子として生まれ、新井雀里に漢学を学んでいる。高崎の蘭学者、江戸の蘭学者に学んだ後、16歳の

とき、大坂の緒方洪庵の適塾に入門し、19歳まで学び、さらに長崎のオランダ商館の医師ポンペにも教えを乞うている。天僕は、医学だけでなく、数学も学んでいたようで、数学の問題の解法を記したノートが残されている[39]。長崎で学んだ後、伊勢崎に戻って開業している。維新期に群馬県内の自由民権運動のリーダーのひとりとなる石川泰三は、天僕が郷学責善堂の頭取になったとき、肝煎になっている。それ以前に天僕から漢学を習っていたのであろう。

天僕から薫陶を受けたものには、石川泰三や武孫平がいる。

松本宏洞

伊勢崎の南部地域で多くの人々を教育した学者が、松本宏洞である。松本は、文政10年（1827）に旧大正寺村に生まれ、幼少より非凡な才能を発揮していたと伝えられている。弘化4年（1847）江戸に出て、書と画を異なる先生に学ぶとともに、儒学者大橋訥庵についている。大橋は、幕府の要職にあった人を暗殺して尊皇攘夷を実践しようとした実践的な学者であった。後、松本自身も水戸藩士藤田東湖から、挙兵に参加するよう誘いを受けるが、断っており、彼自身も周囲から、実践を強く意識した学者として知られていたことが分かる。明治維新後、教育が大切であることを明治3年（1870）、伊勢崎藩知事となっていた旧藩主に訴えると共に、自ら25の私塾を開設したと伝えられている。

松本は、「四民は平等の立場にあって、公に仕える者は清廉潔白を専一にし、実業にたずさわる者は大衆の福利を先に考えて精励し、各自の業に専念して全力をつくすことが愛国である」と主張したと伝えられている[40]。

弟子のひとりが、伊勢崎織物の販売を試みたり、県議会で活躍している野村藤太である。

以上みたように、伊勢崎の儒学者は、極めて実践的であり、社会のあり方に対して働きかけようとする姿勢をもっている。また、伊勢崎を離れて、江戸に学び、さらに諸国を旅行し見聞を深め、蘭学者の場合には、大坂、長崎で学んでいる。伊勢崎に帰ることはあっても、視野は伊勢崎だけでなく、広く日本全体、さらには世界にも及んでいた。

3．8　小括

伊勢崎地域では、商品経済の発展によって社会の支配者ではない庶民が豊かになり、豪農・豪商を中心に漢学・和算が学ばれ、文芸が積極的にたしなまれていた。そして、これらの人々のネットワークが形成されていた。

郷学五惇堂の契機は、享和3年（1803）、伊勢崎藩の御用達である豪農宮崎有成の家に村の同学の人々が集まり講会始めが行われた時、学問の組織を提案したことであった。

また、伊勢崎地方の代表的な儒学者・文化人のひとりで、郷学五惇堂の教授深町北荘、吉沢糟渓等の師でもあった[41]鈴木広川は「文を以て友を会し、友を以て仁を輔く、文無くんば以て友を会するに非ず、友無くんば以て仁を輔くるに非ず。」の意味の文章を残している。彼は、「喫茶談社」というクラブを作り、そこには春冬の暇なとき、毎月一、二日ずつ同友が集まったと言われている。また、「酒を置かず、飯を具せず、ただ苦茶を喫し以て談舌の

資となすなりと、いずれの人たりとも来たり会するを拒まず」の意味の文章を残している[42]。広川自身も農事に忙しかったと伝えられており[43]、農閑期にしか、同学の士と交わることはできなかったのであろう。

鈴木広川が、長尾景範に充てた書状があり、儒学のなかでも学派を異にした二人である[44]が、深い交友があったことを示している。また、鈴木広川と新井雀里が伊与久村の深町北荘に充てた書状もそれぞれ遺されており[45]、豪農と学者の交流を示している。さらに、宮崎有敬が松本宏洞に充てた書状が遺されており、伊勢崎の文化人、儒学を学ぶ人々の間の交友のネットワークを裏付けている[46]。

人々は、漢学・和算で倫理的な陶冶と合理的な思考の訓練を受けていたし、学問の繋がりがネットワークをも生み出していた。

4　学者に学んだ地域社会の指導者たち

地域社会の郷学、私塾で学んだ伊勢崎の近代社会の指導者を織物業の発展に関係する限りでみておこう。

4. 1　石川泰三

伊勢崎社会の指導者であった石川泰三は、幼い頃、地方名望家細野時敏に学んでいる。細野の妻は、渋沢栄一の従兄弟喜作の姉である。石川は、設楽天僕に漢学を学んだ後、東京に出て、喜作の家に下宿して、渋沢栄一に漢学（論語）を教えた尾高惇忠に学んでいる。

尾高は、現在の埼玉県深谷市の豪農の子であったが、取り立てられて幕政に参加し、幕末動乱期には官軍と戦い破れた後、維新政府の下で、殖産興業政策を担った人である。石川は儒学だけでなく、長い幕藩体制が終わった後、民衆が政治の主体になろうとしていることについて、大きな影響を受けたであろう。

石川は明治前期に自由民権運動をするとともに、明治13年（1880）に回天義塾という学校を設立し、明治中期から後期にかけて地方官僚になった後、大正期から昭和初期にかけて、伊勢崎町長として活躍している[47]。

石川の回天義塾においても、漢学のなかで史学が重要な位置を占めていた。教科内容は次のようになっていた。

表　回天義塾の教科内容

漢学科

予備科	素読：四書　五経　日本外史　　講義：皇朝史略　十八史略
	作文：書 仮名交リ文
第4級	素読:：史記　　輪講：十八史略　日本政記　　講義：孟子　文章規範　　詩文：
第3級	輪講：孟子　戦国策　　講義：論語　八家文　　詩文：
第2級	輪講：論語　韓非子　　講義：左氏伝　書経
第1級	輪講：左氏伝　菅氏　荀子　　講義：荘子　易経　詩経

英学科

予備科	綴字書　小地理書　文法書　第一読本　空理初歩　第二読本　万国論
第4級	ギリシャ史　ローマ史　米国史　英国史　小経済書：
第3級	仏国史　万国史　文明史　経済書　政体論
第2級	代議政体　干渉論　経済書　論理学　法理書
第1級	貨幣論　憲法書　心理学　立法論綱　社会学　万国公法

石川は、漢学を学んできたが、彼が設立した回天義塾で教えようとした内容は、「漢学科」の場合も、儒学だけでなく史学を含んでいた。また、英学科の内容は、英語だけでなく、ヨーロッパの政治史や経済学・政治学を含んでいた。広い視野を持っていたことがわかる。蘭学医でもあった設楽天僕から幅広い視野を学んだと思われる。

明治期には自由民権運動で地域をリードした後、大正期に町長となった石川は、教育に力を入れて、町の発展を導く人材を育てた。また、区画整理事業は、伊勢崎町と織物業発展の基盤整備となるものであった[48]。

4. 2　下城弥一郎

下城弥一郎は、伊勢崎の機業家の総代を勤めていた下城近右衛門の長男として嘉永6年（1853）に生まれている。村役人の経歴もある人について万延元年（1860）から手習いを始め、文久元年（1861）から5年間、先に紹介した藩の儒学者長尾景範について、国学と漢学を学んだ後、母親の実家のある世良田村の菊池憲七郎について、数学と漢文を学んでいる[49]。伊勢崎は、近世、多くの和算家を生んでおり、富豪で藩の財政に深く関わっていた御用達の家柄の子弟が、地域の高名な和算家の弟子になっている例もある。弥一郎も経済活動に必要な知識として、和算が学ばれたものと考えられる[50]。

弥一郎は、織物組合の設立、発展だけでなく、地域の経済界のリーダーとして、幅広い活躍をしていた。その貢献は、第1に、私財を投じて、伊勢崎織物の品質を高めるための染織学校を維持することに努めるなど、組合活動を長期にわたりリードしたことである。第2に、地元の商業資本が弱いなかで、下城買継店を創設したことである。第3に、金融機関の整備に尽力したことである[51]。

なお、地方の名望家が子弟教育に積極的であった例を他の上毛地域でもみることができる。例えば、群馬県西部の地域で組合製糸のリーダーであった星野長太郎は、伊勢崎の自由民権家と共に県内の民権運動をリードするが、彼は蓄財を進めるとともに、地域社会で「地方名望家」としての役割を果たしていた。飢饉の際には、自村と近隣村の窮民を助けるために多額の支出をしている。また、その子弟に幅広い教育を与えている。

星野家では、家政を興し、地域社会の指導者としての役割を果たすために、代々、金をおしまず子弟の教育に力を入れており、後には林家家塾で儒学を、千葉道場で剣術を学ぶことが星野家子弟の常になっていたようである[52]。

下城弥一郎だけでなく、織物組合の活動の担い手形成に近世の学問が影響を及ぼしている

ことは、後に織物組合になる太織会社の初代社長宮崎栄蔵が、郷学が盛んであった伊与久の出身で、自身も明治初期には、郷学五惇堂の運営に関係していた[53]ことからも裏付けられよう。

下城家が弥一郎に与えた教育は、地域の名望家として与えたものであっただろう[54]。

4. 3　武孫平

伊勢崎の初代町長となった武孫平（初代）の家は、代々、運送業を営んでいた。近世資料では、伊勢崎町の川岸問屋とある。曾祖父武宜長（よしなが）は、国学者橘守部の門下生であった[55]。橘は和歌の指導者でもあり、支援する桐生の門弟との関係があり、伊勢崎にも来遊していた。宜長の子昌宜（まさよし）（初代孫平）も和歌を残している。武は、明治4年（1871）に弱冠13歳にして、設楽天僕が頭取であった伊勢崎の郷学責善堂の肝煎見習いとなっており[56]、既に儒学の水準が高かったことが分かる。前年には石川泰三が肝煎になっており[57]、ふたりは設楽天僕の下で、研鑽している。

武は、初代の伊勢崎町長として、町政に尽力しているが、他にも幅広い活躍をしており、佐位那波郡私立教育会長、伊勢崎実業協会長、繭糸織物市場取締、群馬商業銀行取締を歴任している。伊勢崎織物との関係では、明治期に組合内部の路線対立から組合の分裂が発生したとき、その対立を調停にしているし、機業家下城家の経営危機の際には、救済に尽力している[58]。

4. 4　野村藤太

野村藤太は、嘉永六年（1853）豪農の子として生まれ、伯父から学んだ後、松本訥庵から学んでいる。明治4年には、自らも惇信堂という漢学塾を開設して教育に当たっていた。維新の教育改革が行われてからは、小学校の開設や運営にあたるとともに、10年には、協同会を組織を作り、欧米の学問を講究したと伝えられている。染織学校の開設に尽力したと伝えられているだけでなく、伊勢崎織物の買継店を東京日本橋に開設しており、織物業の発展にも積極的に関わっている。県議会議員になってからは、廃娼運動をリードしており、リベラルな政治家でもあるともに、熱心なキリスト教であり、伊勢崎教会堂を建設している[59]。

4. 5　星野源左衛門

星野源左衛門は、明治5年（1872）に伊与久に生まれ、後、伊勢崎町の富豪であった星野家を継いでいる。藩校の儒学者新井雀里に学んだ後、東京でさらに学び、同志社大学に進んでいる。町会議員、県会議員としての活躍の期間も長いが、織物業金融を行った伊勢崎銀行の創立に関わり、支配人、頭取等で経営に関わっていた。政治家、経済人であるとともに、教育にも積極的で、伊勢崎工業学校の設立に関わっているとともに、佐波学術研究会という名称で、当時の小学校を卒業して中学を目指していた人たちの教育機関として、学校を作り、後、「佐波学館」となっている。この学校には、明治・大正・昭和にかけて千百人余の卒業

生を送り出して、昭和7年（1932）に閉校となっている。

4. 6　宮崎有敬

宮崎有敬は、先に紹介した郷学五惇堂を設立した在野の儒学者宮崎有成の子で父の薫陶を受け、五惇堂で学んでいる。12歳でこの郷学の肝煎見習（助教）になったと伝えられている。農業用水の事業、製糸の品質を改善するための生糸改法案、藩の軍備に農兵を用いる農兵制、凶作に備える義倉法の立案等、豪農であるが農業改善だけでなく、藩政にも多くの提案をして、改革を推し進めている。明治維新期には、藩の役職についた後、群馬県、大蔵省勧農寮、内務省で働いた後、郷里に帰り、製糸事業を行っている。さらに、明治12年（1889）に、県議会が開催されると初代県会議長に就任している。その後も農地担保の農業金融制度を実現し、農業の発展を進めようと病に倒れるまで、活動していた[60]。

宮崎が伊勢崎織物組合の成立に貢献したことは伝えられている[61]が、どのような貢献であったのか、確たる資料は発見できていない。しかし、織物同業組合が明治43年（1910）に組合の功労者を顕彰したとき、細野時敏らと共に表彰されている[62]。幕末期に織物業者が冥加金として藩に献金をしているとき、伊勢崎町役人であった細野らが世話役、旧下植木村の下城近右衛門と旧木島村の高木幸助の両名が総代の地位にあった[63]が、明治初期の太織会社では、伊与久村の宮崎栄蔵が初代社長をしていた。村内で幕末期から指導的な役割を果たしていた有敬の影響を推定できる。

4. 7　小括

近世から明治初期における地域の教育は、ふたつの面をもっていた。ひとつは郷学に見られる積極的な庶民教育の伝統である。人々が協力して教育を支えたことは、若い人々を育てただけでなく、地域の人々の自主的な活動の伝統をつくるものであった。もうひとつは私塾の流れである。近代社会の指導者になった人々は、私塾で学んでいた。

地域の教育を担った学者は、武士階級あるいは豪農層の出身であった。かれらは、伊勢崎を離れて江戸、大阪、あるいは長崎で学び、深い学識と広い見聞を持って、藩校、郷学で教えていた他、私塾でも若い人々を指導していた。とりわけ名望家の若い人々は、傑出した学者に私塾で教えてもらうという恵まれた英才教育を受けていた。伊勢崎織物の発展をリードした下城弥一郎、発展を支えた活動をした石川泰三、武孫平は、この英才教育のなかで育てられたのである。

藩校の授業の中心は朱子学であったが、歴史学も取り入れられていた。藩校の指導者であった新井雀里の教科書、回天義塾の漢学科の教科内容は、史学が重視されていたことを示している。また、兵法も学ばれており、戦略的な視点も伝えられていたであろう。

歴史を学ぶことで、人は、個々の事跡を超えて、長い人々の営みが大きな時代のうねりを生み出すことを知ることが出来る。個々の戦術の良し悪しだけでなく、長期的な展望である戦略の必要性と有効性を学ぶことが出来る。その人、その人にあった話をしたと伝えられて

いる新井雀里に問いかけられ、教えられるなかから、社会の優れた指導者が育てられた。

5　伊勢崎における自由民権運動

明治期の地域の人々の社会運動である自由民権運動は、伊勢崎地域の特徴を表すものである。

石川泰三が中心となって明治11年（1878）9月に、伊勢崎町に協同社が設立される。協同社の広告では、「講談討論会を毎土曜午後5時より、日曜午後１時より、両会は社員集合し事理を論じ、或いは異聞を談じ、一は自個の学業を研磨、一は以て衆庶の開知を誘掖せんとす」とし、設立の趣意書では、「国家の盛衰興亡する所以のもの、民衆の元気如何にあり」としている[64]。石川は、講演や議論を通じて、民衆の政治的な力を強めようとしていたのである。

この協同社は、製糸業関係者が多く含まれており、上毛連合会という自由民権の運動に繋がっていく。しかし、協同社の役員や社員は「県会議員、戸長、校長らの町の開明的有識者と名望家たちとを交えた少数精鋭分子の集合体」[65]であり、製糸業関係者を糾合した運動に限定されたものと考えられない。

役員中の2名の取締には、近世社会の教育者・政治的指導者であった細野時敏、設楽天僕がおり、発起社員の先頭には、武孫平がいた。協同社にあつまった人々は、近世の知識人・名望家の素養の柱であった儒学の同学の仲間でもあった。

協同社の石川は、13年1月から2月にかけて製糸業者らを糾合して、上野連合会開設を準備し、石川が連合会規則の立案を担当する。この連合会には、県会議長宮崎有敬、副議長星野長太郎らの製糸業者が加わっていた。「開設大旨」で国会開設と殖産興業を訴えているが、石川らの人々は、殖産興業優先の立場で、この呼びかけには、当時協同社社員であった徳江八郎も名前を連ねている[66]。

石川らと共に運動する宮崎は、先にみた群馬県内で最初に設立された郷学の指導者であり、儒学者である父宮崎有成から学んでいるが、幕末には尊皇攘夷の天狗党を支援して幕府に捕まるという経歴がある。また、星野長太郎も、豪農として代々子弟に儒学を学ばせていた家の出身である。

明治13年（1880）の3月には、32名の設立発起者が集まるが、国会開設と殖産興業のいずれを優先するかで対立し、国会開設優先の立場の人々は上毛同盟会に、石川・宮崎ら殖産興業優先の人々は、上毛繭糸改良会社に別れることになった。

伊勢崎における自由民権運動の担い手は、近世以来の社会の変化のなかで、経済活動の重要性を認識していた人々である。幕藩体制で武士の支配下にあったとはいえ、経済的に実力を付けてきた豪農・豪商、さらに民衆が武士の支配を経済的に支えていた現実がある。そうした背景のなかで、経済活動重視の方針となったのであろう。

23年（1890）には、地租軽減期成同盟会が組織される。その呼びかけ人、武孫平・野村藤太・大沢龍磨は、いずれもが、協同社の関係者であった[67]。石川はすでに明治16年（1883）

には、地方官僚になっており、運動から離れるが、協同社に集まった人々のネットワークは続いていた。

6　地域の人々の重層的なネットワーク

伊勢崎織物の発展は、地域の人々の重層的なネットワークに支えられていることが明らかになっている。そのネットワーク形成の前提となっているのが、近世の地域の教育・文化活動のネットワークであり、図1はそれを整理したものである。図2は明治期のネットワークである。

経済活動の担い手に示されている八田栄蔵は、手織製品の機業家であるが、機業家のリーダー下城弥一郎らが設立に尽力した明治商業銀行の監査役について、地元織物業の発展に貢献している。また、多くの会社の株式所有を通して資金提供もしていた。

野村藤太、武孫平、宮崎有敬は、織物業以外の経済活動を行っているが、主として政治的な関わりがあり、伊勢崎織物の発展に貢献していた。例えば、県議会議員野村藤太は、地域の学校教育にも力を尽くしているし、買継商活動、組合の染織学校の設立にも尽力していた[68]。

下城弥一郎、星野源左衛門、小暮英三郎、徳江八郎は、経済・政治・教育文化の3分野に関わる活動をしている。小暮英三郎は、近世には伊勢崎藩の藩校学習堂の頭取であったが、明治期には伊勢崎織物の流通に参加し、織物組合の組合長等、経済活動の指導者でもあった。徳江は、生糸製造業者であるが、石川とともに自由民権運動に積極的に活動している。また、女工教育にも熱心であったことが知られている。地元の銀行経営にも取締役として加わり、機業家の経営危機の救済等にも尽力していた。

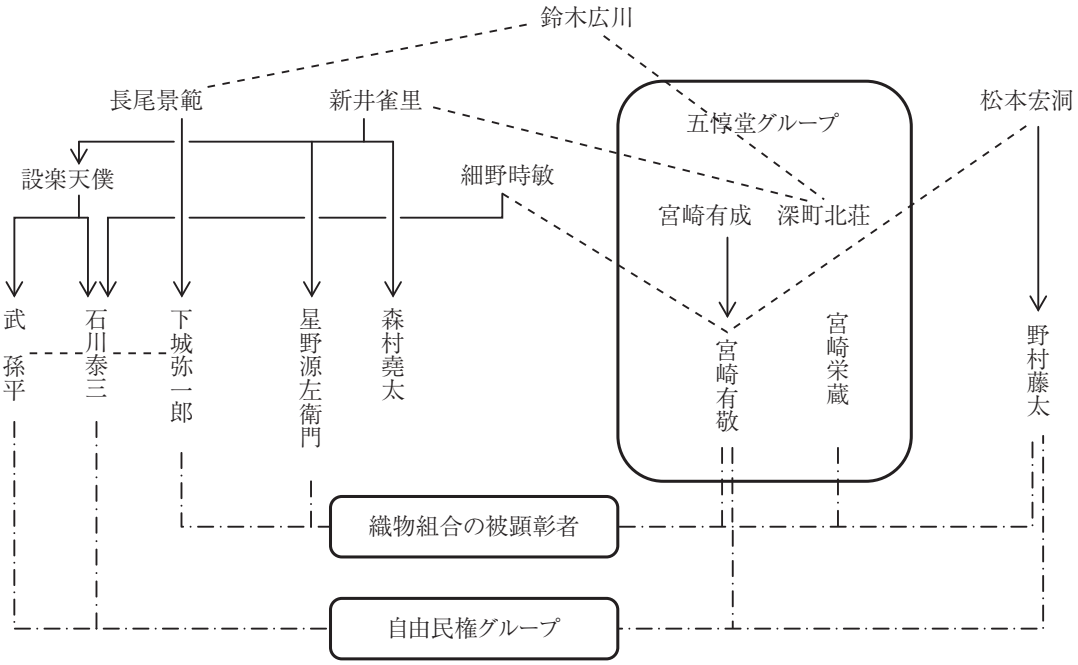
また、戸谷清一郎は、キリスト教徒で改良主義的な活動をしていた。石川が町長になったとき助役になって協力して、伊勢崎の発展に貢献している。二人をつなぐものは、教育者であり、石川の自由民権運動にも協力している設楽天僕である。

こうした人々のネットワークが、地域としての連携を作り出し、組合の結び付きを強力にし、伊勢崎地域の発展によって織物業の発展を後押しし、豊かな地域文化を創っている[69]。近世社会で経済的実力を高めてきた人々が、儒学等の学問、文芸を通じてネットワークを形成してきた伝統は、明治期に人々が、時代の求める社会的課題の実現に向けて新しいネットワークを形成する背景になっていることは、人的繋がりが示している。

7　ネットワークを形成する思想　むすびにかえて

明治期の絹織物の地場産業的な発展が見られた地域では、組合等の活動によって織物業発展が支えられていた。組合の成立・機能強化は決して自然発生的に実現できるものではなく、ネットワークを支える伝統があった。桐生では、近世に桐生国学と呼ばれる思想が社会の指導層に学ばれていた[70]。また、明治期に輸出羽二重産地となった福井県では、機業家が「社」という共同販売組織を形成していた[71]が、福井等北陸地方では、同胞意識を特徴とする浄土真宗が信仰されていた。それらの分析は、別の機会に譲るとして、伊勢崎地域の郷学、私塾

図1　地域の学者・指導者のネットワーク

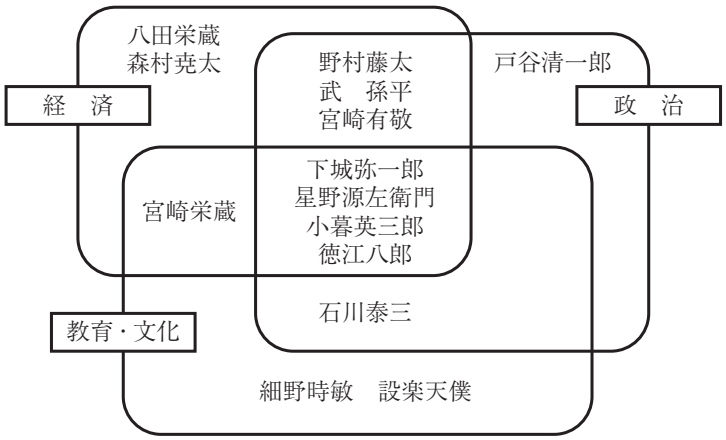


備考1　横書きの氏名は近世の学者・指導者、縦書きの氏名は明治期の社会の指導者

備考2　点線 - - - - は友人関係、↓は子弟関係

備考3　織物組合の被顕彰者は、明治44年及び大正5年の伊勢崎織物同業組合の記念式典において顕彰された人々（伊勢崎織物同業組合編『伊勢崎織物同業組合史』同組合刊、p464-69、昭和6年(1931)を参照）

図2　地域の指導者の活動分野の重なり



に見られる漢学とネットワーク形成の思想との関係を考察しておこう。

互酬性は、ソーシャル・キャピタルの理論的な整理でみたようにネットワーク維持の重要な要素である。人々が互いに信頼に基づいて与え合う関係が持続的に形成されるとき、ネットワークは維持・強化される。しかし、互酬性が成立しない段階、すなわち、人々が協同行為のメリットを理解できない、他の業者から出し抜かれて損失を被るようなリスクに怯える段階で、協同行為を提起し、社会を導くには、経済的関係を超えた要因が必要となる。等価交換では社会の富は現状から増えない。信頼関係によって積極的な働きかけることなくして、自然に高められないからである。

既に明らかにしたように、伊勢崎地域は近世初期から、被支配階級であった豪農、商家の経済力が上昇し、支配階級である武士といえども、こうした経済的な実力がある人々の支持を取り付けることなく、支配体制を維持できなくなっていた。豪農、豪商は、自ら江戸に出向いて学ぶばかりでなく、地域の教育水準も高めていた。漢学や数学が広く地域に普及し、地域の知的水準を高めていた。また、伊勢崎と江戸だけでなく、広く日本のなかに交友関係を造り、高め合っていた。

自由民権運動で、群馬県の運動が二つに分かれたとき、近世から経済的実力を基礎に高い教養を身につけ、社会を動かしていた指導者がいた地域の出身者は、民力重視の立場をとったのは、その歴史からいえば、当然の結論であった。

明治期の伊勢崎織物の発展に大きな貢献をしている組合指導者下城弥一郎、下城を助けて社会基盤の制度に尽力していた武孫平、伊勢崎町の都市基盤の整備と教育から織物業を支えた石川泰三は、若い時期に自己を陶冶する漢学を学んでいた。また、幅広い学識を備えていた地域の学者に教育されており、幅広い視野を学ぶ機会を得ていた。

明治期の伊勢崎織物業の発展は、地域のネットワークを織物組合を中心に強めた。不確実な社会のなかで、ネットワークに参加する人々をリードしていこうとする行動を導いたリーダーは、漢学による自己陶冶と幅広い学識をうる機会を地域社会の伝統のなかで与えられていた人々である。

ネットワークを形成する指導者を生み出す社会的背景として、本稿で検証した教育による自己陶冶、指導者に相応しい視野を学ぶ機会以外に、互酬性を超える社会に対する無償貢献の伝統等の要因も指摘できる[72]。本稿は、伊勢崎織物業の発展を支えたソーシャル・キャピタルの歴史的形成を明らかにする視点から検証したのであり、ソーシャル・キャピタル形成における他の要因の検討は、別稿で試みたい。

謝辞

本研究は、群馬県伊勢崎市の郷土史家新船直孝氏の伊勢崎市の歴史と資料の所在についてのご教示とご協力で進めることができた。ここに深甚の謝意を表したい。

引用文献

1　松嵜久実『地域経済の形成と発展の原理 －伊勢崎織物業史における資本原理と地域原理』CAP出版、2001年

2　伊勢崎市編『伊勢崎市史　通史編3　近現代』伊勢崎市、p56、1991年（以下『近現代』と略記）

3　西垣・山本・丑木共編『群馬県の歴史』山川出版社、p250、1997年

4　明治維新を境に近世から近代に社会が非連続に展開してきたとする見方と連続的に展開してきたとする見方がある。非連続性はあるが、近世から継承してきたものを前提に、近代があったとするのが、筆者の考えである。この時期の教育史的な視点からの研究に川村肇著『在村知識人の儒学』思文閣出版、1996年がある。

5　松嵜前掲書、p100

6　金子・松岡・下河辺『ボランタリー経済の誕生』実業之日本社、1998年、今村・園田・金子『コミュニティのから －遠慮がちなソーシャル・キャピタルの発見』慶應義塾大学出版会、2010年、稲葉陽二『ソーシャル・キャピタル入門 －孤立から絆へ－』中央公論新社、2011年、理論的整理が宮川公男によっておこなわれている（宮川「ソーシャル・キャピタル論 －歴史的背景、理論および政策的含意－」（宮川・大守共編『ソーシャル・キャピタル －現代経済社会のガバナンスの基礎』所収））

7　R.D. Putnam, “Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy” Princeton University Press, 1993, R.D.Putnam, “Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community” Simon & Schuster,2000

8　このことについての簡単な理論的な検討は、H. Matsuzaki “A trade association in the Traditional Weaving Industry and their Leaders”（Oxford University Press, “The Role of Traditional Factors in Japanese Industrialization”, 2004）で行っている。

9　岡田重五郎『両毛機業大観』岡田重五郎発行、p186、1917年

10　金井一頼「経営戦略とは」、p14（大滝・金井・山田・岩田『経営戦略』有斐閣、2006年所収）

11　コンピュータ産業の事例として、IBM社をパンチカードによる情報処理の会社からコンピュータによる情報処理の会社に果敢に転換したトーマスJr.（Thomas J. Watson Jr.　and Peter Petre, “Father Son & co. －My Life at IBM and Beyond”, Banton Books, New York, p112-129, 1990）や日本におけるコンピュータ開発を牽引した富士通の岡田完二郎を巡る資料（『岡田完二郎さんの思い出』編集委員会『岡田完二郎さんの思い出』中央公論、1973年）が、果敢な経営を行った指導者達には、強い精神力を養った体験があったことを示している。また、多くの問題を抱える地域の課題を解決してきた政治的指導者の事例として、群馬県の過疎山村上野村を振興した黒澤丈夫の事例（黒澤丈夫『過疎に挑む　わが山村哲学』清文社、1983年）、照葉樹林を残す運動を展開して町興しに成功した宮崎県綾町の郷田實（郷田實・郷田美紀子『結いの心 －子孫に遺す町づくりへの挑戦』評言社、p194-202、2005年）

12　伊勢崎市編『伊勢崎市史　通史編2　近世』伊勢崎市、p214、1993年（以下『近世』と略記）

13　『近世』、p220-223

14　『近世』、p236

15　『近世』、p241

16　『近世』、p228

17　『近世』、p247-251

18　『近世』、p396

19　『近世』、p405-9

20　『近世』、p383
21　西垣・山本・丑木共編前掲書、p250
22　湯浅正彦編『境町史　第三巻　歴史編上』境町、p441-45、p455-459、1996年（以下『境町史』と略記）
23　『近世』、p268
24　塚本哲三編『小学、孝経、孔子家語』末延文庫、p7、p12、1927年
25　中村彰彦『保科正之 －徳川将軍家を支えた会津藩主』中央公論新社、1995年を参照
26　渋沢栄一・守屋淳現代語訳『論語と算盤』筑摩書房、p142-5、2000年（原著は、渋沢の講演の講述筆記を梶山彬が編集したもので、1916年に東亜堂書房から刊行されている。同書、p11-12参照）
27　市来津由彦「山崎闇斉『大和小学』考 －中国新儒教の日本的展開管見」は、「皇帝と意見があわず、あくまで自身に道理があるとすれば、辞任する、すなわち「去」るといったこともありえた。」（p245）とし、さらに、次にように整理している。「官人としてのこうした立場に立ちながら政治的諸事に対処していく（「治人」）、その心の主体性を保持する（「修己」）ことが、彼らの精神生活には求められた。そのような「修己」と「治人」とを統一的に把握するという課題に応えて、彼らに人生の指針を与えるものとして普及したのが朱子学である。」
同様の指摘は、嶋田虎次『朱子学と陽明学』（岩波書店、p97、1967年）でもされている。
以上から、近世中頃から、儒学者のなかから、尊王思想家が現れるが、革命思想は儒学そのものに内包するものであるといえよう。
28　『境町史』、p443
29　『境町史』、p442
30　『近世』、p630-41
31　『近世』、p632
32　『近現代』、p78-80、p106、p245
33　『境町史』、p450-55
34　兵法書から経営に関わる大きな示唆を得ている経営者は、中国の兵法書『孫子』を高く評価し、推奨している（越智直正『仕事に生かす孫子』到知出版社、p21-23、2014年）。長尾は、機業家の子弟である下城弥一郎に軍法を教えたか否かは不明であるが、兵法書が伝える基本的なものは、師から弟子に伝わっている可能性はあろう。
35　橋田友治『下城弥一郎』伊勢崎郷土文化協会、1977年の黒澤哲氏の「発刊によせて」を参照
36　『伊勢崎町郷土史』（伊勢崎文化協会の1981年刊の復刻版を使用）、p106、1910年
37　同書、p108
38　『近現代』、p74
39　伊勢崎図書館所蔵『設楽天僕関係資料』
40　長谷川龍雄「近代民間教育の実態」（伊勢崎市史編さん専門委員会『伊勢崎市史研究　第1号』1983年所収）、p29
41　「境町史」、p443-445
42　伊勢崎市編『伊勢崎市史　資料編3　近世Ⅲ』伊勢崎市、p978-9、1986年
43　しの木弘明『境町人物伝』境町地方史研究会、p52-53、1985年
44　『近世』、p582
45　伊勢崎市編『伊勢崎市史　資料編3　近世Ⅲ　付録　近世文人書状』伊勢崎市、p49-50、p74-75、p77、1986年
46　同書、p73-77

47　石川泰三については、長谷川龍雄『是我　石川泰三伝』伊勢崎郷土文化協会、1972年を参照
48　松嵜前掲書参照
49　下城弥一郎については、『下城弥一郎』を参照
50　『近世』、p630-41、矢内新蔵家は、天明12年（1815）の藩財務史料で、米払会所に小暮此右衛門に次ぐ2千両の出資をしている（『近世』、p234-36）。同家は、文政7年（1824）の時点で、田畑34町8反余を所有していた。さらに、生昌が12歳の天保3年（1832）に父がなくなり、後を引き継ぎ、さらに土地所有を進めており、嘉永3年（1850）には、田畑49町6反を所有していた。新蔵生昌は、柳沢伊寿という和算家についていたことが知られている（『近世』、p636-39）。
51　下城弥一郎の事績については、松嵜前掲書参照
52　飯岡秀夫「新井領一郎の思想と足跡」、p83、p88（高崎経済大学附属産業研究所 編『近代群馬の経済思想：経世済民の系譜』日本経済評論社、2004年）
53　しの木弘明「郷学五惇堂」で資料として紹介されている「五惇堂買物簿」（明治四辛未年九月吉日）には、宮崎栄蔵が肝煎の一人として挙げられている（『境町歴史資料　76』境町地方紙研究会、p28-29、1969年）。
54　黒澤は、前出の「下城弥一郎」の前書きで、組合活動と商道徳を貫く弥一郎の行いを「少年時代の学問に帰因するのではないか」としている。
55　『近世』、p598
56　「故武孫平君彰徳碑記」（新船直孝私稿『伊勢崎町の発展と街の中心意識』（伊勢崎市立図書館所蔵）参照）
57　図書館所蔵『石川泰三家資料』の石川泰三の履歴参照
58　松嵜前掲書参照
59　群馬県議会図書室編『群馬県議会史　別巻　群馬県議会議員名鑑』、p369、1976年
60　前出『境町人物史』、p131-35
61　同書、p133
62　伊勢崎織物同業組合編『伊勢崎織物同業組合史』同組合刊、p464-69、1931年
63　『近世』、p408
64　『近現代』、p116-17
65　『近現代』、p117
66　『近現代』、p118-20
67　『近現代』、p123
68　前出『群馬県議会議員名鑑』、p369
69　松嵜前掲書、p102-06
70　西垣・山本・丑木共編前掲書、p249
71　福井県の羽二重生産の歴史については、神立春樹『明治期農村織物業の展開』東京大学出版会、1974年。地域の浄土真宗の実態と社会生活への影響については、三上一夫『明治初年真宗門徒大決起の研究』思文閣出版、1987年、三上一夫『日本近代化と真宗地帯の研究』思文閣出版、1989年、雄有元正雄『宗教社会史の構想』吉川弘文館、1997年、が詳しい分析を行っている。輸出羽二重流通における社の機能については、隼田・白崎・松浦・木村『福井県の歴史』（山川出版社、2000年）を参照。
72　大きな社会貢献をしている人々の伝記等は、それらの人々の人生の過程で、献身的な支援を受けた経験、人々の協働の経験を伝えている。一例として、島根県の過疎地域で義歯装具を製造する会社を営みつつ、地域の再生に努力している中村俊郎のアメリカ留学における人々からの支援を

挙げることができる（千葉望『500人の町で生まれた世界企業 －義歯装具メーカー「中村プレイス」の仕事』ランダムハウス講談社、p56-70、2009年）。また、団塊の世代に高齢者になりつつあるが、その人々が学生時代に社会活動をして、積極的に社会参加する意義を体験していたことが、地域社会の活動に積極的になる背景になっている事例もある。

Summary

The Historical Analysis of the Educational Tradition and the Formation of Social Capital
— The Local Education and the Leader in Isesaki Region —

Hisami Matsuzaki

Social capital can be scrutinized both from theoretical and empirical perspectives. I have analyzed how social capital affected regional economies in my book dealing the economic history of Isesaki weaving industry. In my last analysis I have successfully shown that the volume of social capital could be changed due to the structure of regional economies. However, I have failed in finding the effect of ideological or religious elements towards social capital.

In this article I scrutinize the regional tradition of education in the Edo period. In this area the education of confucianism and mathematics were popular among not only the governing class but also the governed classes.

Many scholars developed own knowledge in the region and in other regions, then they taught young people in the quasi public schools or own private schools. Through such education, the leaders in this region could develop their own practical ethics and broad perspectives. Without those acquired skill and attitude the social network could not be originated under unprecedented and risky environment.

Conclusively, the tradition of regional education contributed very much in the formation of social capital in the region.

Keywords Social Capital, Isesaki Weaving Industry, Confucianism, Network, Quasi Public School

（2014年6月19日受領）